〈評論〉ブッダゴーサの歴史的位置づけをめぐる馬場紀寿氏と清水俊史氏の論争 1（序言）

佐々木　閑

1.

シャカムニによって創成された仏教の教えが，古代インドのパーリ語で伝えられるようになったのは、シャカムニの生存時期から間もない頃であろう。そのパーリ語聖典は今もブッダの教えを語る言語として用いられている。したがってパーリ語は、およそ２５００年間、仏教聖典を守り続けてきた聖語ということになる。この間、インドやスリランカの多くの仏教徒たち、そして後には東南アジアの仏教徒も含み込んで、膨大な数の人々がパーリ語を覚え、唱え、心に刻んできた。パーリ語は、ブッダの教えを現代に伝える最古の言語である。

しかし、パーリ語で書かれた仏教文献が純粋に学問の対象として扱われ始めたのはごく最近のことで、１９世紀前半にイギリスのインド、スリランカ支配が強まる中、ターナーなど好学の士がスリランカ人僧侶から習い、自力でパーリ語文献を読み始めたのが最初である。その後をうけて、チルダースがパ英辞書をつくり、リス・デイヴィッズがパーリ聖典協会 (PTS) を設立したことで、ヨーロッパ文献学を礎とする実証的パーリ仏教学の世界が一挙に花開いた。

それがちょうど我が国の明治期と重なったため、開国して貪欲に西洋文明を吸収しようとする日本全体の流れに沿うかたちで、そのヨーロッパ仕込みのパーリ仏教学も日本に入ってきた。高楠順次郎、長井真琴、木村泰賢、宇井伯壽、水野弘元、中村元といった巨人たちが、サンスクリット語やパーリ語を用いるヨーロッパ仏教学と、飛鳥時代以来の伝統的な日本の仏教学を融合し、その結果として日本独自の雄大な仏教学を生み出したのだが、その一環としての

パーリ仏教学も日本独自の発展を遂げ、他にぬきんでた成果を挙げてきた。最近はいささか諸外国に押され気味の感もあり、兜の締め直しも必要となってきたが、それでも日本に、パーリ仏教学を志す人は多い。先人の学恩に報いるためにも日本の仏教界は一層の奮励精進を心がけねばならない。

ところで最近、その日本のパーリ仏教学界において、注目すべき論争が発生した。これは素晴らしいことであって、どのような学問分野でも、学説と学説、理論と理論がしのぎを削り、火花を散らすところに新たな知見が開ける。互いが知力を絞って正々堂々と持論を展開し、学説の是非、優劣を競うなら、考察は深まり、時には誰も想像しなかった新発見へと繋がることさえある。論争が起こるのは、その学問分野に活力がある証拠であり、大いに歓迎すべき事である。

今回の論争の当事者は馬場紀寿氏と清水俊史氏である。馬場氏は現在、５０歳すこし前、清水氏は３０歳代と、どちらも若手のホープである。その二人が、仏教史の中のブッダゴーサの位置づけという重大問題をめぐって相反する説を主張し、論争するのであるから、大いに注目される。私はこのテーマを専門とする研究者ではないが、２人の論争者のどちらともある程度のご縁があるし、随分と複雑なこの論争の中身をよく理解したいという思いもあるので、思い切って評論を書くことにした。書評ならぬ「論争評」である。少しでも多くの人に、こういった本格的論争がパーリ仏教学界でおこなわれているという現況を知ってもらうのが一番の目的である。

２．

現段階での馬場・清水論争は、それぞれが一冊ずつ出版した研究書と、複数本の論文を通して展開してきたのだが、そのうちの清水氏が出版した『上座部仏教における聖典論の研究』には、きわめて深刻な問題がからんでいる。本稿の題目とは直接関係しない話だが、私の個人的理由でどうしてもそのことを語っておく必要があるので、少々おつきあいを願いたい。

清水氏の『上座部仏教における聖典論の研究』（以下、清水『聖典論』と略称）は２０２１年の２月に出版されたが、ほぼそれと同時期（同年１月２８日）に、出版元の大蔵（だいぞう）出版から、驚くべき声明がネット上に発表された。以下、その全文を転載する（https://www.daizoshuppan.jp/news/n39180.html）。

『上座部仏教における聖典論の研究』に関する声明

このたび、清水俊史氏の『上座部仏教における聖典論の研究』（以下、『聖典論』）が弊社より刊行されることとなりました。本書『聖典論』をめぐってはかねてから、さる先生を中心に異様な盤外戦が繰り広げられ、間違った情報が意図的に流布されており、出版元である弊社としましても大変困惑しております。正確な状況を説明する必要性を感じましたので、極めて異例のことではありますが、今回、弊社は公式な声明を発表することと致しました。

2016 年に『聖典論』の刊行が社内で決定した後、2017 年 4 月に清水俊史氏より「さる先生から自分に研究不正があるとの指摘を受けた」との報告が弊社にありました。それに前後して、弊社に対しても、そのさる先生から『聖典論』の出版を取り止めるようにとの連絡を数度にわたり受けました。

両者の申し立ての後、弊社は、第三者委員会を立ち上げ、複数の専門家に双方の資料を精査していただいたところ、全会一致で研究不正にはあたらないとの結論を得ました。なお、精査いただいたある専門家からは「（さる先生からの）批判は正当ではない」「（さる先生が）指摘するような不正行為はない」と断言され、また別の専門家からは「権威ある肩書を持つ研究者が、自分を批判した若くて立場の弱い研究者の研究不正を言い立て、学術振興会などに告げ口して葬り去ろうとする行為は、フェアでない」との発言もいただいており、弊社としても深く同意するところです。

また、本書をめぐっては、これを焚書にしようとする不正な接触がありました。2017 年 9 月に花園大学で開かれた日本印度学仏教学会の場にお

いて、さる先生の消息筋より清水氏に対し「『聖典論』を出版するな。これ以上（さる先生を）批判すると、就職先がなくなるぞ」などと脅迫ともとれる接触のあったことが複数の関係者によって現認されており、弊社としてもこれが実際に起きた出来事であると認めざるを得ません。

さらに、さる先生から弊社に対して行われた出版差し止めの要請も「出版したら書評で清水を潰す。大蔵出版の姿勢も叩く」などと脅迫ともとれる言説や、「清水君が出版をあきらめれば、彼の就職を応援する」などと研究者倫理に反するともとれる内容が含まれていました。第三者委員会の結論に加え、このような諸事情からも、弊社は、さる先生の主張が「研究不正の正当な告発」ではなく、清水氏の名誉を毀損する極めて悪質なハラスメントであり、弊社に対する不当な出版妨害にあたると判断し、『聖典論』出版の決意を新たにしました。

学問の自由を守るべき研究者自身が、その学問の自由を脅かそうとしている事態に、弊社としては憂慮の念を禁じ得ません。今後ともそのような圧力に屈することなく、良質な仏教書の出版に努めてまいりたいと存じます。

読者諸賢におかれましては、ぜひ虚心坦懐に本書をお読みいただきたく願います。『聖典論』は出版前から大変な注目を集める力作であり、弊社が格別の自信をもって世に送り出すものです。そこで示される知見は仏教学の新たな地平を切り開くと確信しております。

2021 年 1 月 28 日　　大蔵出版株式会社

この驚くべき声明文は、私がこの論考を執筆している２０２１年１１月現在もそのまま大蔵出版のホームページに揚がっている。この声明文が発表された時には、インターネット上でも随分話題になり、加害者を特定しようという動きもあったが、その後、沙汰止みになったようである。この声明文の内容を事実とするなら、大変な事件であることは言うまでもない。今の世は研究者のモ

ラルが大いに問われる時代であり、研究費の不正流用、研究成果の捏造・盗用などがどれほど厳しく処分されるかは、メディアを通して広く認知されてきている。当然ながら、ここで報告されている、清水氏本人および大蔵出版への出版妨害ならびに脅迫的ハラスメントは、そういった悪行と並ぶ重大行為である。

さてそれで、問題の加害者であるが、私はそれを知っている。声明文にあるように、2017 年 9 月、私が勤務する花園大学で開かれた日本印度学仏教学会の会場において、清水氏本人へのハラスメントがあったのだが、たまたま私はその場に居合わせたのである。ハラスメントがおこなわれている間ずっとその場にいたわけではなく、私の場合は、ハラスメントがおこなわれる前段階の場面に遭遇したのだが(なんともどかしい表現をお許し願いたい)、ただその時、私 (私の妻も同席していた) の目の前で語られていることの重大性を感じ取り、「きわめて理不尽なことがおこなわれる」という感覚は持ったものの、その後、学会の業務で座を離れざるを得なかった。しかしその後もその場に残っていた別の人がおり、その人は実際にハラスメントがおこなわれた現場を目撃している。その事は、学会が終了した直後に、ご本人から聞いた。そして「やはりとんでもないことが起こったのか」とあらためて驚愕した。

以前、大蔵出版の人と会う機会があり、清水氏がいわれのない研究不正の非難を受けているという話は伝え聞いていたのだが、まさかそれが、ここまでエスカレートしているとは想像もしていなかった。後で気になって清水氏本人に確認をとったところ、確かにハラスメントを受けたと言う。しかし、このような脅迫には負けずに自著をなんとか出版にまで持って行くつもりだという意思表示をしたので、私としてはそれ以上なにも言わず成り行きを見守ることにした。私自身が見聞した事実と、周囲からの情報はすべて矛盾なく付合し、きわめて重大な悪行が進行しているということを確信したのだが、ただ、それを当事者でもない私が指摘するのは筋違いであるし、なによりも私のおせっかいが清水氏の出版を邪魔するようなことになるのを恐れて、事態を静観することにしたのである。

それから足かけ４年が経過し、突然その問題の書、清水『聖典論』が出版された。しかも同時に、先の声明文が大蔵出版から発表されたのである。私はびっくり仰天した。出版社がここまで苛烈な声明文を出すというのは異例のことである。大蔵出版がどれほどこの問題に憤っており、本気で対処しようとしているのか、事の真相を知っている者として、それが身に迫って感じられた。

清水『聖典論』が出版され、大蔵出版からはこのような声明文が出され、さてそれからどうするのか、という話になる。おそらく加害者が「はい、私がやりました」と名乗るはずもないので、あとは清水氏の方から積極的にアクションを起こすしかない。この声明文の情報はネットでかなり拡散し、大手新聞社の記者も動き出した。読売新聞東京本社文化部の記者氏が，私が真相を知っているということをどこかで聞き、連絡してきたのである。情報を共有した結果、記者氏は「清水さんがなんらかの形で被害届を出し、それが公になったなら記事にできる」と考えて、清水氏と連絡をとったのだが、そこで状況は膠着した。

なんとか出版にまでは漕ぎ着けたものの、清水氏はもはやこの件に一切関わりを持ちたくないと言って、被害届の提出を躊躇しているというのである。記者氏はかなり積極的に説得したらしいが、事件のことを考えるだけで胸が苦しくなるという状況にまで追い込まれていて、被害届の提出は無理ではないかということであった。

そこまで徹底的に追い込まれながら、清水『聖典論』を出版した清水氏と大蔵出版の気力・努力の強さをあらためて知ったが、本人が被害届けを出さないと、これ以上の責任追及は望めない。もし仮に、清水氏が被害届けを出し、審理が始まり、証言を求められるようなことがあれば、情報を共有している周囲の人たちとともに正しく事実を語ろうとは思っているのだが、現段階ではそれができない状況である。

この先、清水氏がこの問題にどう対処するかは本人の選択であるから私があれこれ言うことではない。そこで私も当面黙ることにした。黙ったままでじっと観察することにした。加害者の周囲には、組織内で加害者と利害を共有し、

加害者を援護している人もいるようなので、そういった人たちの言動を逐一観察し記録する。これが今の私にできる唯一の行動である。その記録は、状況が変われば公にできる時が来るかもしれない。ひょっとしたら記録だけ残して死ぬかもしれないが、それはそれで構わない。これほど情報発信手段が進歩した時代にあっては、本人が生きていようが死んでいようが情報はいくらでも送り出すことができる。死んだ後のことを誰かに託しておけば、望みの時期に望みの方法で記録を表に出すことは容易である。むしろその方が、周囲に余計な迷惑を掛けることなく存分に真実を語ることができて良いかもしれない。

加害者側が清水氏に対しておこなった行為から類推して，このような評論を公にした私に対しても，様々な攻撃がおこなわれる可能性はある。おおっぴらな攻撃は，自らの行為を告白するようなものであるから，おそらくは秘密裏に，私の言動の信頼性を損なわせるような策を練るものと思われる。幸いなことに私はもう人生の峠も越し，守るべきものもないので構わないが，そのような私に引き比べて，傑出した能力を持ち，堂々と論陣を張りながら，邪な妨害によって人生の登り口で足を引っ張られた清水氏の心中を思うとやるせない。ともかく先のことはあまり考えず、今は加害者たちの言動を冷静に見届けることに注力するつもりである。

以上、事実関係を大まかに語った。このあと少しだけ私の思いを述べよう。高楠順次郎に始まる日本の栄えあるパーリ仏教学の世界に、突然このような醜聞が生じたことは痛恨の極みである。過去の偉大な先学達の一人ひとりを思い浮かべた時、確かに癖の強い方や気の強い頑固な方も大勢おられたが、誰一人として邪な方法を用いて後進の研究を妨害しようとした人などいない。皆、いやしくも仏教という、「正しい心の在り方」を追求する宗教の研究者である。どれほど激しく議論を戦わせ、時にののしり合うことがあったとしても、人倫の道を踏み外してまで相手を打ちのめそうする悪邪心の人はいなかった。なぜそれが、今この時になってこのような事になるのか。白く清浄なはずの仏教学という布地の真ん中に、突如として黒い染みが現れ、しかもそれがじわじわと

広がりつつある。なんとかそれを止めなければ、やがては布地全体が黒く汚れていくだろう。それが私の１番の心配の種である。一体，日本の仏教学はこの先，どうなってしまうのか。

このまま事件が糊塗され、もし加害者が権威ある立場に立つようなことになれば、当然のことながらその周囲の人たちは,「知っていながら知らないそぶり」で日常を過ごさざるを得なくなり，その結果として否応なく各人の倫理観が減衰していく。周囲の皆が，悪行を悪行として指弾することをはばかる人になっていくということである。加害者と同等の倫理観しかない人達のグループが形成され、それがさらに次の世代に影響を与えていく。一旦このような連鎖が始まれば、日本の仏教学全体が倫理観の地盤沈下を起こす。「邪な方法を用いて他者の研究を妨害することで保身を図っても構わない」と考える人たちが増殖していくということである。

明治期以来の仏教学の巨人たちの写真を見ると、みな威厳があり、その心中に、学問に向き合う強い意志と強固な倫理性があることを感じる。それがこのようなかたちでくずれていくなら、私たちはこの先人たちに対してとうてい顔向けができない。なんとか日本の仏教学を黒い染みから守る方法はないかと思案する日々である。

３．

清水『聖典論』の出版にまつわる不快な話はここで打ち切る。本稿の主題とはなんら関係のない別件としてご了解いただきたい。ここからは，馬場氏と清水氏の学問上の論争に話題を転じる（本稿は〈評論〉という体裁なので，人物名には敬称をつける）。

馬場氏は２００８年に『上座部仏教の思想形成　―ブッダからブッダゴーサへ―』（以下，馬場『上座部仏教』と略称）という学術書を出版した。ほどなくしてこの本は，日本の仏教学界で大きな評判を呼び，高い評価を受けるようになった。馬場『上座部仏教』において馬場氏は，スリランカや東南アジア仏

教国に広がる上座部大寺派が伝持しているパーリ語文献のみならず，説一切有部など他部派の文献や大乗経典，三蔵法師の旅行記など幅広い文献をきわめて広範にかつきわめて緻密に分析し，その結果として，上座部大寺派の形成においてブッダゴーサが果たした特別な役割を明示した。ブッダゴーサが上座部大寺派の歴史上，きわめて偉大な人物であることは言わずもがなの周知の事実であるが，それはあくまで，聖典註釈者として偉大さであった。「ブッダゴーサは傑出した註釈家である」と皆が認識していたその中で，馬場氏は「ブッダゴーサは単なる傑出した註釈者なのではなく，一個の思想家でもあった」と言ったのである。以下，この本の概略をご紹介する。

馬場『上座部仏教』の本論は３部構成になっている。第一篇「成仏伝承の展開」，第二篇「修行体系の再構築」，第三篇「パーリ正典の確立」の３篇である（その後さらに結論，あとがき，書誌情報等が付されている）。この３篇のうち，第一篇は，成仏伝承，すなわちブッダが成道する場面においてなにを悟ったのか，という問題に関して，上座部大寺派内で，その悟りの内容が変更されている，という事実を論証するものである。第二篇は，修行体系の解説が，ウパティッサの『解脱道論』からブッダゴーサの『清浄道論』へと引き継がれる過程において大きく変更されていることを論証し，ブッダゴーサの思想的位置に関して新たな見解を提示するものである。そして第三篇では，パーリ三蔵が現在のようなかたちへと確定した歴史的過程を文献的に跡づけ，パーリ三蔵の最終的な確定者がブッダゴーサであり，しかもその確定作業が，ブッダゴーサ独自の思想的立場の表明としておこなわれたものだという新説を提示している。この第三篇によれば，従来，すぐれた註釈者としてのみ評価されていたブッダゴーサが，実は独自の立場を有する思想家であり，その著作には彼の思想が反映されているという，まったく新たなブッダゴーサ像が示される。そのブッダゴーサによって規定されたパーリ三蔵が，その後の上座部大寺派における揺るがぬ正典として位置づけられたために，パーリ三蔵は強い排他性と強固性を持つようになり，変わらぬ姿で今にいたっているというわけである。

第一篇と第二篇では上座部大寺派内での思想の転換が詳細に論じられるが，第三篇になって，それが実はブッダゴーサよりも前の思想すなわちブッダ以来の旧来の思想が，ブッダゴーサによって新たな思想へと変更されたことによる思想転換だったのだと，意味づけられる。この本の副題が「―ブッダからブッダゴーサへ」となっているのは，この新説の意味を端的に表している。

馬場『上座部仏教』は出版後高い評価を受け，馬場氏の代表的研究となったが，その一番の理由は，この第三篇において，従来誰も指摘しなかった「思想家としてのブッダゴーサ」という人物像を提示し，しかもそのブッダゴーサの思想が，現在の上座部大寺派の在り方の基盤になっているという，きわめて刺激的な学説を，豊富な文献資料によって提示したからである。

その後，この馬場『上座部仏教』を激賞する森祖道氏の書評も出版され，いよいよ評価は高くなった。ところがこれに対して２０１６年，清水氏が反論を提示する。それは馬場説の要ともいうべき第三篇の全体に対する批判であり，ブッダゴーサは，馬場氏が言うような独自の思想を持った思想家ではなく，あくまで１人の註釈家であったというのが清水氏の主張である。もし清水氏が正しいとすると，馬場『上座部仏教』の第三篇の全体が否定され，さらにはその第三篇と連結すべく論じられている第一篇，第二篇に関しても，ブッダゴーサとの関連性を主張する箇所については否定されることになる。学説そのものの浮沈に関わる重大な批判である。

すぐに馬場氏からは再反論が提出され，この論争は深みを増していく。清水氏に対しては，同じパーリ学者である林隆嗣氏からも批判が提出され，馬場，清水，林という，現代日本のパーリ学を牽引する気鋭の学者３名がしのぎを削るという状況になったのである。そして２０２１年２月，冒頭で語った出版妨害およびパワーハラスメント事件の黒い霧を払いつつ，清水『聖典論』が出版された。

私は，この段階までの論争を視野に入れて，その成り行きをできるだけ客観的に紹介していきたいと思っている。本稿はその「序言」である。本格的な論

評は続稿で語るが，今回はその準備として，馬場『上座部仏教』の内容と成立過程を大まかに紹介したい。

4．

馬場『上座部仏教』の第一篇において馬場氏は，上座部大寺派内における独自の成仏伝承の展開を論じている。その概要は以下のとおり。

ブッダが悟りを開く過程は，もともとは初夜・中夜・後夜の３段階で三明を獲得し，その，後夜における第３段階では四諦を認識する，とされていたが（四諦型三明説），（少なくとも有部においては）紀元後２世紀までに，悟りの第３段階では四諦ではなく縁起を認識した，あるいは四諦とともに縁起も認識したという別の形の伝承（縁起型三明説）が生み出された。

また，この流れとは別に，三明に言及することなく，ブッダは縁起を認識して悟りを開いたと説く阿含／ニカーヤ経典も存在していた（縁起成仏説）。

ウパティッサの『解脱道論』は古い四諦型三明説を保持していたが，それを元にして『清浄道論』を書いたブッダゴーサは，四諦型三明説の箇所を，『無礙解道』などに説かれる縁起説を利用して，縁起型三明説へと書き換えた。これによってブッダゴーサは「ブッダの悟りは縁起の認識であって，四諦の認識ではない」と考えていたことが分かる。さらに，ブッダゴーサは『法集論』が説く「無為法は涅槃に限定される」という大寺派の教義を受けて，無為法の定義を涅槃に限定して理解していたことを考え合わせれば，「シャカムニは悟りを開く時，無為法である涅槃を含む四諦ではなく，縁起という有為法を認識してブッダになった」という成仏の構造を想定していたことが分かる。

5．

第一篇は，シャカムニが成仏する際の体験が主題であったが，第二篇「修行体系の再構築」では，より一般的に，出家修行者が悟りを開いて阿羅漢になる際の体験が論究対象とされる。

出家修行者が悟りを開く過程を語る基礎資料は『長部』戒蘊品に記される修行論であり，①戒→②４段階の禅定→③５種の神通→④四諦の認識→阿羅漢という過程が示される。そこには「四諦の認識」が重要な要素として含まれている。説一切有部（経部も含む）や正量部でも，この『長部』戒蘊品の修行論と同様に，四諦の認識が修行体系の根幹とされている。そして上座部内においても，『解脱道論』は，やはり同じく，四諦観察を修行の根幹とし，①四諦の観察→②無常・苦・無我を観察→③四諦の認識，という構造をとっている。ところがこれが，ブッダゴーサの『清浄道論』になると大きく変容し，①「諸行の確定」「条件の把握」→②「無常・苦・無我」の観察，という構造に変わっている。「四諦の観察」や「四諦の認識」が削除されている点が重要である。馬場氏は，この変容の状況を，文献内の複数の記述をあげて紹介し，そこには，修行体系を「無常な諸法（苦諦，集諦，道諦）と永遠の法（滅諦）の平行観察」とする従来の教義を斥け，「無常な諸法（諸行）の観察による永遠の法（涅槃）への到達」という新たな修行体系を導入しようとするブッダゴーサの思いが現れているという。そしてこのブッダゴーサの編集作業によって，上座部大寺派は，四諦観察を中心とする説一切有部や正量部の修行体系とは異なる，諸行の観察を中心とした独自の修行体系を確立したというのが第二篇の結論である。

6.

馬場『上座部仏教』では、第一篇、第二篇に続く第三篇が，馬場氏の学説の眼目である。最も注目すべき主張は，ブッダゴーサが自己の思想に基づいて三蔵を固定的・排他的に定義したため，それが後々，上座部大寺派の「正典」とみなされるようになったというもので，これまでは単なる１註釈者とみなされがちであったブッダゴーサが，実は上座部大寺派の在り方を決定づけた思想家だったという刺激的な内容である。

第一篇で示した「ブッダゴーサは『清浄道論』で，成仏伝承における四諦型三明説の記述を，『無礙解道』などに説かれる縁起説を利用して，縁起型三明

説へと書き換えた」という説も，第二篇で示した「ブッダゴーサは『清浄道論』で，『解脱道論』の修行体系から四諦観察の部分を削除し，諸行の観察を中心とした独自の修行体系へと改変した」という説も，ブッダゴーサが思想家であったことを主張するこの第三篇の傍証として作用することになる。

第一篇，第二篇が言っているのは，ブッダゴーサの『清浄道論』は，『解脱道論』にはない新たな思想を導入したという事実であって，それがそのまま，ブッダゴーサがその思想の発想者であったということにはならない。確実に言えるのは，上座部内において『解脱道論』から『清浄道論』までの間に，第一篇，第二篇で示した新たな思想が生まれていた，ということまでであって，その発想者がブッダゴーサだったということは論証されていない。すでに存在していた上座部大寺派内の新思想を考慮したブッダゴーサが，それに合うかたちで『清浄道論』を編纂した，という可能性も十分あるからである。

それに対して，この第三篇では，「他ならぬブッダゴーサ自身が自己の思想に沿って，五部ニカーヤの１つである小部を，それまで言われていた十二書，十四書などの構成ではなく十五書と確定した」等，大寺派が現在も保持し続けている種々の特性の発生源をブッダゴーサ個人へと収束させている。この第三篇こそが馬場説の要であり，ブッダゴーサの素顔をはじめて世に知らしめた研究として大いに評価されたのである。

そして先述のように，この第三篇の全体に対して厳しい批判を発表したのが清水氏である。したがって，馬場・清水論争というのは，この第三篇の是非をめぐる論争ということになる。馬場氏，清水氏はどちらもパーリ仏教研究の精鋭であるから，その論はきわめて詳細かつ繊細で，だらだらと散文を連ねて紹介できるものではない。本稿を「序」としたのは，そういった第三篇をめぐる両者の論争を紹介するにはしっかり腰を据えてかかる必要があり，それには本稿１本ではとても無理なので，このあとの続稿で丁寧に論じていきたいと考えたからである。

７．

最後に，馬場氏が２００５年に東京大学大学院へ提出した博士論文と，馬場『上座部仏教』との関係について一言述べておく。この博士論文は『三明説の伝承史的研究　―部派仏教における仏伝の変容と修行論の成立』というタイトルで，２００５年９月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出されたもので，審査に合格した後，２００６年３月に学位が授与された。この時，審査にあたったのは，下田正弘氏，森祖道氏，そして私（佐々木閑）の３名であった。森氏はパーリ仏教学，とりわけパーリ註釈文献の世界的権威であるから審査員になるのは当然である。私がここに加わっているのは，律蔵を専門とし，パーリ文献をよく扱うということも理由の１つであろうが，馬場氏が，私が勤めている花園大学の卒業生で，その時から面識があったというのも呼ばれた理由の１つだと思っている。審査員を選出した下田氏の心遣いであろう。

さてそこで，その博士論文の内容であるが，序章も含めて全７章の章題を並べることで全容を見ていただこう。

序章　本論の目的と研究方法

第１章　パーリ文献資料論

第２章　上座部大寺派における仏伝の変容

第３章　上座部大寺派における修行論の成立

第４章　諸部派の三明説

第５章　仮説の検証

第６章　結論

第１章では，５部ニカーヤのひとつである小部 (Khuddakanikāya) が現在形の１５書に確定していく過程を，文献学的に跡づけている。さらにはブッダゴーサが『清浄道論』や四ニカーヤ註において聖典の外延を規定したために，聖典が固定化し，上座部大寺派の聖典観が確定したという説を語っている。この第

１章が，馬場『上座部仏教』の問題の箇所，すなわち第三篇に相当するのだが，興味深いことに，ここにはブッダゴーサを，独自の思想に基づいて『清浄道論』やニカーヤ註を著した思想家と見る視点はどこにも書かれていない。３２ページに「また，はじめて Khuddakanikāya を十五書に確定した資料がブッダゴーサ作の註釈文献（または，ブッダゴーサに帰せられた作品）であることを考えると，Khuddakanikāya の実質的な編纂者は註釈文献の編纂者だった可能性が高い」とあるが，決してブッダゴーサを独自の思想を持った思想家として見てはいない。

続く第２章は，仏伝におけるブッダの悟りの内容に関する論考で，ブッダの悟りの内容が上座部大寺派内で変更されたことを示している。これは馬場『上座部仏教』の第一篇に相当する。そして第３章は，出家修行者が悟りを開いて阿羅漢になる過程が，上座部大寺派内で変更されたことを論証するもので，馬場『上座部仏教』の第二篇に相当する。そして第４章からあとは，第３章までの学説を裏付ける傍証の議論であって，馬場『上座部仏教』全３篇の中に組み込まれているものもあるし，削られているものもある。

以上が馬場氏の博士論文の概要である。したがって，馬場氏が博士論文を提出した時点では，ブッダゴーサを，独自の思想によって『清浄道論』やニカーヤ註を著した思想家だと考えてはいなかったということが分かる。馬場氏は，博士論文を提出したあと，馬場『上座部仏教』出版までの間にこの新説を生み出したのである。このことは研究者として全く当然の作業である。資料から情報を汲み上げ，それに基づいて次第に知見を広げ，誰も気付かなかった事実に気付き，新説として発表する。馬場氏はこの当然の作業を，博士論文提出から，馬場『上座部仏教』出版までの間におこなったということである。

ただ，こういった学説構築の手順を知っていると，馬場説の理解には大いに役立つ。馬場『上座部仏教』の第一篇，第二篇はすでに博士論文中で論じられており，第三篇についても，ブッダゴーサを独自の思想家として設定する箇所は存在しないが，それ以外の論考の多くはすでに博士論文中で論じられている。

しかしそれでも馬場氏は博士論文において，「ブッダゴーサを独自の思想家である」とは結論づけなかったのであるから，「ではどういう根拠に基づいて馬場氏は馬場『上座部仏教』でブッダゴーサを独自の思想家だと想定したのか」という，重要な問題設定が可能となる。馬場『上座部仏教』の第一篇でも第二篇でもなく，さらには第三篇の中のすでに博士論文中で論じられている部分でもなく，それ以外のどのような情報に基づいて，ブッダゴーサを独自の思想家だと想定することができたのか。あるいは，すでに博士論文で論じられている議論のどの箇所を新たに解釈し直すことによって，ブッダゴーサを独自の思想家だと想定することができたのか，という視点で馬場『上座部仏教』を読めば，学説構築の全体像がよく見えてくるであろう。

馬場『上座部仏教』の「あとがき」（265ページ）を見ると，「本書は，二〇〇五年九月に東京大学大学院人文社会系研究科へ提出し、翌年三月に学位を授与された博士論文、「三明説の伝承史研究―仏伝の変容と修行論の成立」を改稿して出来上がった作品である。」とあるだけなので，馬場氏の博士論文がほぼそのままのかたちで馬場『上座部仏教』として出版されたと勘違いされる可能性が高い。この博士論文には，馬場『上座部仏教』の核心的学説が入っていなかったことを，この文から知ることは不可能である。もちろん馬場氏のこの書き方に問題があるわけではないが，大いに誤解される可能性を含んでいるので、馬場・清水論争を詳細に検討する準備段階としてそのことを指摘しておく（実際、Amazonの馬場『上座部仏教』や清水『聖典論』に対する多数のレヴューには、馬場氏の博士論文と馬場『上座部仏教』を同一視して論じる誤った記述も存在している）。

それでは次稿から，馬場『上座部仏教』の第三篇に焦点を絞って，清水氏からの批判を織り込みながら，論じていくことにする。

（花園大学　教授）